

MIDI検定試験官インタビュー 「MIDI検定2級資格保持者の現在と将来」



JSPA理事／上杉尚史氏



JSPA理事長／大浜和史氏

M C：AMEIが主催するMIDI認定制度も、平成10年に第1回「MIDI検定3級試験」が実施されて以来すでに丸6年が経過した訳ですが、本日は最上位資格である2級資格保持者の現在と将来について、この認定試験の実施に携わるJSPA日本シンセサイザー・プログラマー協会のお二人にお話を伺いたいと思います。

まずは、MIDI検定2級の取得がいかに難しく、どの程度の実力の人たちが合格するのかをお話し頂けますか。

大 浜：現在のMIDI検定の資格は3階級ありまして、4級→3級→2級の順にレベルが高くなっています。4級と3級は筆記試験だけですが、2級は筆記試験と実技試験に分かれており、3級資格を持っていてなおかつ2級の筆記試験に合格した人だけが実技試験に進むことが出来ます。実技試験では課題曲（1曲）のデータ、スコアが提示され、受験者には音楽的内容を事前に理解して頂きます。試験では穴開き、誤りのあるデータに入力、編集する20問が出題されます。90分の作業時間でデータを正確に仕上げる技術力が求められます。課題曲は商品レベルのMIDIデータが用意され、クラシック、ジャズ、オリジナル曲と曲調は毎年異なります。

上 杉：採点ではもちろん音楽の評価も加味されますが、2級の試験はアーティスト的な音楽表現能力を問う試験ではなくて、あくまでもMIDIデータの打ち込み実務能力を評価することが主な目的ですから、課題曲に盛り込まれている以上の音楽能力は要求されません。調理師で言うと、お客さんに出せる料理を調理出来る能力、と言えます。

ちなみに、受験者は複数用意されたパソコン

（MacまたはWindows）とシーケンス・ソフトの組み合わせから受験環境を選択できるようになっていて、会場には設定済みのパソコンが用意されます。

大 浜：この6年間でMIDI検定3級を受検した総数13,691人のうち、2級の筆記試験に進んだ人は3,021人、更にその内で実技試験に合格した人はわずか212人（受験者総数の約1.5%）ですから、筆記試験だけの3～4級に比べると、2級のレベルは専門知識においても技能においてもやはり歴然とした差があります。

M C：2級資格者はどのような現場で実力を発揮できるのでしょうか。

大 浜：まずは、通信カラオケや着信メロディのデータ制作、あるいは販売用の各種MIDIデータ制作の現場ですね。それからレコーディングスタジオではMIDIデータ編集は必ず行われる作業でもあり、かなり以前から定着しています。

上 杉：そのほかにも電子楽器周りの商品サポートや販売現場、音楽教育の現場などがあると思います。もちろん、電子楽器メーカーに勤務している方もいます。筆記試験の出題範囲には、オーディオやマルチメディアに関する知識も含まれていますので、最新の電子楽器を扱うことの出来る人材としても活躍の場があると思います。特に2級資格者は一人のユーザーであるという点が大きなポイントではないでしょうか。

M C：どういう立場の方々が受験して、その後どういう活動をしていますか。

大 浜：例えば学生さんは、就職時の資格と捉えて受験する方が多いです。音楽講師の皆さんの場合は、楽器のレッスンと平行してMIDI教育を音楽指導の一環に取り入れている方も増えてきましたね。また趣味の分野で、学習の成果として目指す方もいます。

上 杉：コンテンツ制作会社で半強制的に資格を取らせたり、社内で実力評価の対象になっているところもあるようです。また、求人の際にMIDI検定資格を必須条件にする企業も出てきていて、この業界で仕事をする人にとってこの資格は重要な意味を持っていると言えます。実数は把握していませんが、社会人資格者のうちの8割くらいは、その関連の仕事に従事していると推測しています。ただ、企業としては、このMIDI検定資格だけよりも、例えばWebコンテンツ制作やソフトウェアプログラミングのような、複合的な能力を持った人材を求める傾向があるようです。

大 浜：先ほども言いましたが、2級は他に比べて秀でたレベルであることから、この資格を取ったことでその関連の会社に就職した人もいと聞きました。逆に、せっかくこの資格を持っていないながら、自分で納得できる活動の場を得ていない人たちもまだまだたくさんいると思います。MIDIライセンスのサイトではこのような方々のために求人広告も掲載していますが、更に多くの求人が有っても良いと思っています。

【参考】MIDI検定オフィシャルサイト

<http://www.midilicense.com/>

M C：この資格を今後どのような形に発展したいですか。

大 浜：今後は世界共通のMIDI規格同様に、国際的な資格に持って行きたいですね。まず第1ステップとして中国での展開の準備が現在進んでいます。更には米国に対しても働きかけを試みています。MIDI規格そのものも普及活動を進めて行く必要があると思います。

M C：その他、2級資格にまつわるエピソードをお聞かせ下さい。

大 浜：2級合格者同士でのメールによる情報交換や親睦会なども活発に行われているようです。受験会場は東京と大阪だけなのに、九州や北海道からの受験者もいて、AMEI主催の合格者座談会には遠方の方も熱心に参加下さっています。

また、2級合格者は最年少の高校1年生から最年長は70歳台の方まで、幅広い年齢層に渡っています。

上 杉：受験者の中にコンピュータの基本的な使い方を知らない方がいたのには驚きました。もちろんそういった方は合格できないのですが、暗記だけで筆記試験を通過した人をふるいにかけてくれるという点で、実技試験の意味があると思います。

また、出題者側の配慮として、これはコンテストではないので、受験者の芸術的能力に左右されない出題をするよう、心がけています。

M C：本日はお忙しいところ、貴重なお話をありがとうございました。



MIDI検定2級実技試験会場

MIDI検定2級ライセンサー座談会

